

読み方を自覚する国語科の授業づくり

——今西祐行「一つの花」(光村・四年上)の実践を通して——

小出真規

一 研究の意図

「国語の授業では、どんなことをしたらいいのかはつきりしない」という声を小学校の現場においてよく耳にした。文学教材の授業にあつては、漢字や音読の指導、意味調べを行い、いざ読むとなると学習活動が停滞してしまふといった経験を私もしてきた。いったい「読むこと」の授業でどんな力を身に付けていけばよいのか、はつきりしていないと感じている現場の先生は多いと思われる。

では、「読むこと」においてどんな力が付けばいいのだろうか。それは多岐にわたる力の育成が求められる複雑な現代社会において一言ではおそらく表すことができないのであるろうが、まずは、「表現」に確かに関わって「読み」を作る力が必要であると言えよう。そして「読み」を作った過程を自覚し、なおかつ、その力を使ってさらに次を読み進めていく(読み方を自覚して読む)ことのできる子ども

もが育つようにしていくことが国語科の授業には求められている。

「表現」とは、文章における「ことば」や「ことば」とばの関係である。書き手は読み手へ伝えるための工夫として「表現」の仕方を工夫している。読み手はそこから「読み」を作る。工夫は描写表現、心情表現、設定の表現などに表れている。そうした「表現」の仕方に関わって「読み」を作り、そして、「読み」を作った過程が自覚できるようにする。授業において、「この表現からは、○○なことがわかったよ。」「会話文と会話文をつなげてみると○○なことがわかったよ。」といった「読み」がつくれるとともに、その過程が自覚できる指導の工夫を積み重ねていく必要がある。

そうした「読むこと」の授業を重ねていくことで、「読み方」の自覚を促し定着を図るとともに、身に付けた「読み方」を自覚的に用いながら文章にかかわっていかうとす

る子どもを育てることを目指していきたい。

二 研究の内容

(1) 学習材の特性

戦争の時代において生きたゆみ子と父、母の物語である。食料難や空襲、出征によって人間が人間らしく生きることが許されなかった時代においても子どものことを何よりも大切に思う父母のあたたかさを、人物の行動や会話などの描写表現から読み取っていくことができる。

子どもは、戦争とは縁遠い世界で生活しており、場面設定に関しては補足の説明が必要となる。困難な状況下での生活について少しでもイメージを豊かにもつことで、それは対照的な子を思う親のあたたかな心情を際立たせて読むことができる。

また、題名でもある「一つの花」にある「一つの」にこめられた意味の変化や、父が出征する際にゆみ子に渡したコスモスが、十年後に咲き誇る様子が描かれるなど象徴的な表現も用いられている。物語が終盤に至るまでに読み取れることをもとに、「一つの花」という言葉やコスモスの花にこめられた父母の願いについて想像して読むことが可能な構成になっている。

最後の場面で描かれる、母とゆみ子が貧しくもコスモスに囲まれて幸せそうに生きている場面からは、戦争という

困難な時代においても人間が人間らしさを決して捨てることなく生きた証を感じ取るのできる作品である。

(2) 指導方法の工夫

① ワークシートの工夫

ワークシートには場面ごとの本文や挿絵を掲載するとともに、子どもが自分の考えを書き出すことのできる余白スペースを設けた。めあてに対する自分の考えを本文の表現を抜き出して表したり、その表現から父、母のゆみ子に対する思いなどを読み取って書き込んだりすることができるようにした。また、ことばとことばを関係付けて読みをつくる際にもスペースがあることで矢印や線をつかって結び付けて表しやすくなるようにした。

② 板書の工夫

板書には、子どもの読みとそのもとなった表現を、表現と表現を線でつないだり、その結果として読み取れることを色チャートを使い分けながら位置づけていく。また、「読み方」を「読みの手がかり」とネーミングし、子どもの発言や、教師の意図に合わせてラベルで位置づけていく。子どもの読みと注目した「読みの手がかり」が板書を概観すると見てとれるよう構造化して示すようにする。

③読み深めの工夫

全体での話合いの際に子どもの発言が集まったり、子どもの読みが分かれたりしてきた際には、発問を投げかけ立ち止まって考えることができるようにした。交流を通して読みが深まることでそれに関係する「読みの手がかり」についての有用性が認識できるようにする。

④グループでの話合いの工夫

全体での話合いの中から生まれた新たな問いについては、一人一人が自分の考えをもったのち、グループでの交流を行い、互いの考えを聞き合うことで読みを広げたり深めたりすることができるようにする。一斉授業の形態を一度離れることで、一人一人が改めて自分の読みについて吟味をしたり評価をしたりすることができるようにする。

⑤単元構想の工夫

三次では、同じ作者による「すみれ鳥」の重ね読みを行う。二次で「読みの手がかり」として身に付けた「言葉にこめられた意味」に注目して読むという活動を重ねて行うことで、「読みの手がかり」の定着がより図れるようにする。

(3)単元構想

①単元名 コスモスの花にこめられた意味を考えよう
(小学校第四学年)

学習材 「一つの花 今西祐行」(光村図書四年上)

「すみれ鳥 今西祐行」(偕成社)

②単元目標

○ 場面の状況や登場人物の気持ちについて関心をもち、お父さんやお母さんのゆみ子への思いなどについて読もうとしている。(関心・意欲・態度)

○ 場面設定、行動描写、会話文、比喩表現、象徴的表現などの「読みの手がかり(読み方)」に着目して読み、登場人物の気持ちや願い、作者がことばにこめた意味などについて考えることができる。(読む能力)

○ 様子や行動を表す言葉について考えたり、語句の性質や役割を理解したりすることができる。(知識・理解・技能)

③単元計画(全九時間)

第一次 「二つの花」を読み、学習課題をつかむ。

第一～二時 本文に出会い、感想をもとに学習課題をつかむ。

第二次 五つの場面を順に読み、「読みの手がかり」に

注目しながら、登場人物の気持ちを読み取る。

第一時 お母さんのゆみ子を思う気持ちを讀み取る。
第二時 お父さんのゆみ子を思う気持ちやゆみ子の将来の成長についての不安を讀み取る。

第三時 お父さんとお母さんのゆみ子を思う気持ちを讀み取る。

第四時 お父さんのゆみ子への思いやコスモスにこめたい願いを讀み取る。

第五時 ゆみ子が平和で幸せに生活していることを讀み取るとともに、お父さんがコスモスにこめたい願いについて考える。

第三次 作者が特別な意味をこめた言葉に注目するといふ「讀みの手がかり」を用いて別の作品を讀む。

第一時 「すみれ島」の讀み聞かせを聞き、新たな学習課題をもつ。

第二時 全文を讀み、作者がすみれの花にこめたい願いについて考える。

(4)指導の実際

①第一次第一～二時 感想をもとに学習課題をつかむ。

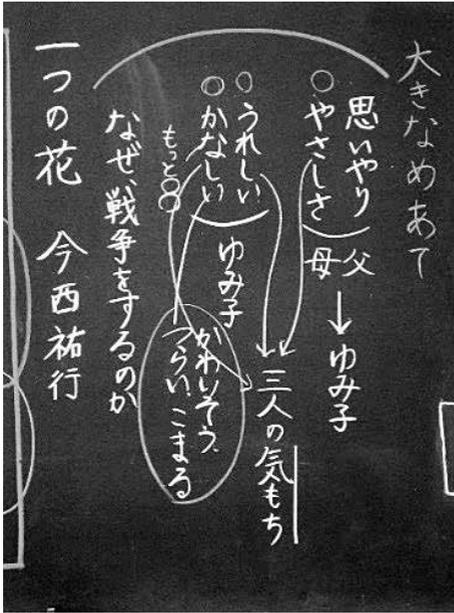
授業として学習材に出会う前に、題名讀みを行った。讀み進めていく中で題名のもつ意味にも目を向けて欲しいと考えたからである。既に一讀している子が三割程度いたが、「一つの花」という題名から、「花が出て

くるお話だ」「戦争だけど、一つの花が出てきてやさしいお話だ」などと内容について予想したり、題名のもつ意味について感想を述べたりする子もいた。教師の範読後、先の戦争についてのおおまかな概要を伝え、現在とは違う戦時下という特異な状況におけるお話であるという認識をもてるようにした。場面の設定に関する語句の確認を行ったのち、登場人物や題名についてという視点を示して感想をノートに書かせた。続いて、個人でもった感想をもとにして学習班ごとに「大きなめあて」(学習課題)を考えるようにした。子どもは、「お父さんとお母さんがやさしい」「これはとてもかわいそうなお話だ」「登場人物の気持ちがあくわしく読めそうだ」「どうして戦争なんかするんだろう」などと班ごとに「大きなめあて」について考えをまとめていった。班でまとめた「大きなめあて」を全体の場を出し合い、その傾向から学級としての学習課題を「お父さんお母さんのゆみ子に対するやさしさやゆみ子の家族がかわいそうなところをたしかめよう」と設定して学習を進めていくことになった。

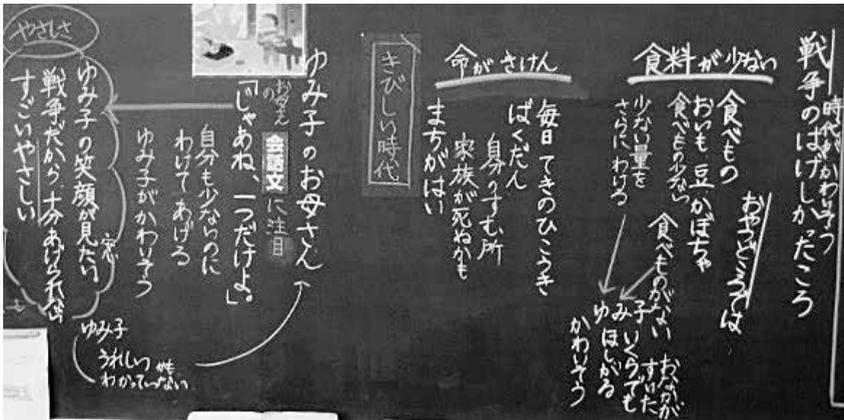
②第二次第一時 お母さんのゆみ子を大切に思う気持ちを読み取る。

前時に決めた「大きなめあて」を全員で振り返った

後、本時場面を音読した。子どもは「戦争でかわいそう」「お母さんはやさしい」などの感想を思い出しながら、本時のめあてを「戦争でかわいそうなところや、お母さんがゆみ子にやさしいところを見つけよう」とした。学習場面の本文や挿絵が掲載され、自分の読みを表すことのできる余白スペースを用意したワークシートに、めあてに対する自分の考えを書きこんで表していた。そして、自分の考えを発表しながら、戦争というきびしい時代でのお話であることや、そんな中でもゆみ子のお母さんがゆみ子にやさしくしている様



【第一次 大きなめあて】



【第二次第1時 板書】

子を読み取っていった。お母さんがゆみ子に食べものをわけてあげていてやさしいという子どもの発言から、教師が「お母さんには、たくさん食べ物があるのか」と発問すると、子どもは、「戦争で食料が少ないんだから、お母さんにも少ししかないはず」「それなのに、ゆみ子にわけてあげていてすごくやさしい」「お母さんは食べ物がなくたって、ゆみ子の笑顔が見たいんだ」などとお母さんのゆみ子を大切に思う気持ちについて読みを深めていった。

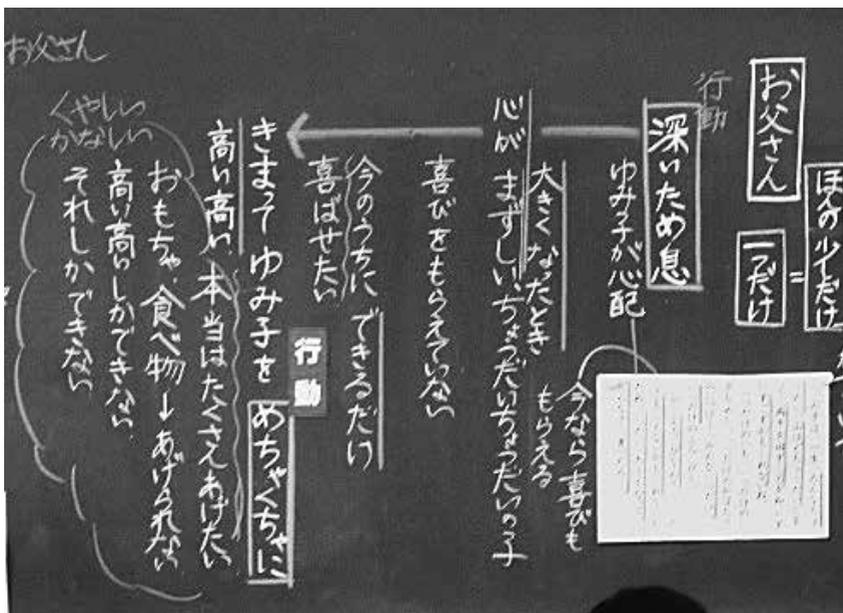
授業の振り返り場面では、どの表現からお母さんのやさしさがよくわかったのかをたしかめた。子どもは、「じゃあね、一つだけよ」という会話文やお母さんの行動を表す表現から読みを深めていったことを明らかにした。板書に、「会話文」「行動」といったラベルを貼り付けて、「手がかり」として位置づけた。ワークシートのまとめ欄には、お母さんのやさしさについてわかったことに加えて、「手がかり」（注目した表現）を書きこみ、本時のまとめとした。

③第二次第二時 お父さんのゆみ子への思いや不安を読み取る。

導入では、前時のまとめを振り返り、わかったことと「手がかり」を想起した。「会話文」やお母さんの「行

動」から読みをつくってきたことを確かめ、本時の学習場面についても「手がかり」を使って読めそうだという見通しをもった。子どもは、本時場面の音読後、お父さんのゆみ子に対する心配な気持ちに気付き、めあてを「お父さんがゆみ子にやさしいところや心配しているところを見つけよう」とした。そして、「深いため息」やお父さんの会話文などの表現から、ゆみ子の将来を心配するお父さんの気持ちを読み取った。そこで、教師が「ゆみ子が心配なら、もっと他のことをして喜ばせてあげた方がいいのではないか」と問いかけると、「戦争中だからそれはできない」「お父さんはそれしかできなかったんだよ」と子どもは発言してきた。戦争中で食べ物さえ不足する状況であることを確かめた後、「新たな問い」として、「高い高いしかできない父さんはどんな気持ちなのか」について学習班で話し合った。

学習班での話し合いは、予め司会役を決めておき、順に「新たな問い」について自分の考えを出した後、班として意見をまとめるという手順で進めた。できるだけみんなの意見を入れてくわしくまとめるという決めに沿って話し合った。子どもは他の単元や他教科の学習で話し合う経験を重ねていることもあり、順調に話し合い活動を進めていくことができた。その後、班



【第二次第2時 板書】

で話し合ったことを発表し全体で読みを深めていった。本時場面の前半のお父さんの様子とつなげて、「お父さんはゆみ子を心配しているのに、戦争中だから高い高いしかしてあげられなくてくやしい気持ちだと思う」などといった読みが深まった姿が見られた。「手がかり」としては、「お父さんの行動（めちゃくちゃに高い高い）」に注目して読んだことを確かめた。

以下、第二次三時～四時については同じ展開で授業を進めた。概要のみ記す。

④第二次第三時

お父さんとお母さんのゆみ子を大切に思う気持ちを読み取る。

めあて

かわいそうなところや、お父さんやお母さんがゆみ子にやさしいところを見つけよう

子どもの読み

かばんの中身や、おにぎりを全てゆみ子にあげてしまうお母さんの行動や、ゆみ子に対するお父さんの行動から二人のゆみ子に対するやさしさを読み取った。

新たな問い

「戦争にいく他の人とゆみ子のお父さんの様子がちがうのはなぜか」

まとめ

(読み)

お父さんは戦争のことより、ゆみ子のことを考えて小さく歌を歌ったりばんざいをしたりしている。

(手がかり)

「行動を比べた」(ほかの人とお父さんの出征の様子)

⑤第二次第四時

めあて

お父さんがコスモスにこめた願いを読み取る。

お父さんやお母さんがゆみ子にやさしいところや、ゆみ子が喜んでいるところを見つけよう

ゆみ子のことや心配だったお父さんが、食べ物以外のことや喜んでるゆみ子を見て安心した。

新たな問い

「ゆみ子やお母さんが大切なお父さんなのに、『一つの花』を見つめて何も言わずに行ってしまったのか。」

まとめ

(読み)

お父さんはコスモスに意味や願いをこめた。それは、お父さんが行ってしまうけど、ゆみ子に強く生きて欲しい、という願い。

(手がかり)

コスモスに「こめられた意味、願い」を考えた。

⑥第二次第五時

ゆみ子が平和で幸せに生活していることを読み取るとともに、コスモスにこめられた願いについて考える。

子どもは、コスモスがたくさんに増えていることが

わかる情景描写や「お肉とお魚と・・・」の会話文、ゆみ子の行動描写などに目を向け、「ゆみ子は平和で幸せにくらしている、お父さんの願いがかなったんだ」などと読みをつくってきた。そして、前時に読んだお父さんの願い「たくましく育て」に付け加える形で、コスモスにこめた願いは、「平和」、「幸せ」だと読み取った。そこで、教師から「願いをこめたのはお父さんだけか」と発問した。子どもは、作者の存在に気づき、「コスモスに意味をこめて書いたのは作者だ、コスモスには作者の願いもこめられている」と読み取ることができた。

本時の手がかりが、「作者が言葉にこめた意味を考えた」とまとまってきたところで、「すみれ島」の紹介をした。同じ作者の作品ということや題名だけを子どもには伝えたが、「題名に花の名前があるから、また意味がこめられてそうだ。」「今西さんは、すみれに

何か願いをこめていないか」と感想を述べ、第三次へ向けた学習の方向付けを図ることができた。

⑦第三次

作者が特別な意味をこめた言葉に注目するとう「手がかり」を用いて別の作品を読む。

前時に紹介した「すみれ島」の読み聞かせを行った。この作品は絵本の体裁をとっているため、ページごとの絵を書画カメラでスクリーンに写しながら読み聞かせを進めた。物語が扱うのは戦争末期に行われた特攻作戦。特攻については、子どもたちにもあまり知識がなかったため、客観的な情報を教師の側から伝えた。読み聞かせの後、「このお話のすみれにも平和という願いがこめられていそうだ」と多くの子どもが似た感想を出してきた。そこで、新たな学習課題を「作者がすみれの花にこめた願いは平和なのか確かめよう」として、学習の見直しをもった。

第二時目には、全文を掲載したワークシートを用いて学習を進めた。登場人物がすみれの花とかわる場面を中心に「子どもたちは、すみれの花に平和への願いをこめて航空隊の人へおくっている」「航空隊の人にとって幸せの思い出になっている」「出撃して日本を守ろうと思っている」などと読みを作ってきた。そこで、絵本の中の航空隊の人が出撃前に眠る場面の絵

を提示して、「これは何の絵かな」と問いかけた。日本の昔の古い家を描いた挿絵から、子どもたちは、これは兵隊さんたちが生まれた家だと発言してきた。そこから、「出撃前の日に、自分が生まれた家の絵が出てくるのは、どんなことを願っているからなのか」と発問した。子どもたちは、「昔のように平和に暮らしたかった」「生まれた家でもっと生きたかった」「平和な世の中になって欲しかった」などと読みを作ってきた。

子どもは、第二次で発見した「読みの手がかり」をもとに、「会話文」や「行動」に目を向け、短い時間で自分の読みをつくっていくことができた。特に、第二次で発見した「読みの手がかり」である「言葉にこめられた意味を考える」という読み方を、三次で見直しをもって用いながら読む経験を重ねたことは、子どもの「読みの手がかり」に対する有用性の認識を高める上で効果的であったと考える。

三 まとめ

本研究のテーマ「読み方を自覚していく国語科の授業づくり」を具現化していくためには、子どもが身に付けた力、本実践でいうなら、「読みの手がかり」に注目して読むという力を発見することに加えて、それを用いて読む（ある

いは他の言語活動を行う)ことが求められる。そうした学習活動の経験を重ねていくことで、子どもは、「読みの手がかり」の有用性を認識し、自覚的なことばの学び手となっていく。本実践では、特に「作者が言葉にこめた特別な意味」に注目して読むという活動を三次で重ねる単元を組んだ。学習材の特性としてそれがふさわしいと考えてのことである。実際の子どもの姿からは、この「読みの手がかり」を用いて読むことの連続性は効果的な活動であったと見てとれた。おそらくこれからの普段の読書活動においても、読む際の一つの手がかりとして用いていくことができそうである。

第三次にどのような言語活動を行うかについては、様々な選択肢がある。教科書の例示に沿うにしても、そうでないとしても、子どもが身に付けた力を使うという連続性は保障されるようにしたい。「前は○○に注目して読んだ、今回もそれが使えそうだな」と子どもが発達段階に応じて、自覚的に「読みの手がかり」を用いていく姿を国語科の学習としてはこれからも目指していきたい。

(岡山大学教育学部附属小学校)